九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

一九世紀末におけるフィリピンの改良的民族主義

谷川，栄彦

https://doi.org/10.15017/1447

出版情報：法政研究. 29 (1/3), pp.301-318, 1963-02-28. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：

一九世紀末におけるフィリピンの改良的民族主義

谷川栄彦

まえがき

東南アジアの民族主義は、一般的に、一九世紀末から第一次世界大戦にかけて勃興した。その民族主義は地域や組織を異にするに従って多種多様な現象形態をとっていたが、その指導的社会階級および運動の目標・方法を基礎にすれば、改良的民族主義（Evolutional Nationalism）と革命的民族主義（Revolutional Nationalism）の二つに大別することができた。前者は民族ブルジョアジーによって指導され、植民地権力と協調を保ちながら、植民地体制内において一定の自治を獲得することを直接目標としていた。これに対し、後者は土着の小ブルジョアジーによって指導され、植民地政権に対して非協調政策あるいは武力斗争をおし進めることによって、民族独立を達成することをめざしていた。改良的民族主義は、大体において、民族主義の発生期における支配的・指導的勢力であったが、その運動が民族独立に対して大きな限界をもっていることが明白になったとき、改良的民族主義は革命的民族主義や共産主義の民族独立運動に席を譲った。

この小論は、右のような改良的民族主義の特徴を、一九世紀末における発生期のフィリピン民族主義について検討しようとするものである。フィリピンの民族主義は、一九世紀の八〇年代に入って明白な運動の形態をとるようにな

ったが、その運動は改良的民族主義のそれであった。

一、民族主義の発生

フィリピンは、一六世紀中葉から一九世紀末まで約三五〇年間にわたってスペインの支配下におかれたが、その植民地支配はフィリピン人に対する貪欲きわまりない搾取・収奪、一片の自由さえ認めない専制政治、社会生活の全ての面に対する宗教的干渉に終始した。スペイン絶対主義王朝を代表した総督・「領主」（Encomenderos）、およびカソリック各派の教団僧（Friars）が、残酷な植民地支配のおもな担い手であった。[一] 三五〇年間のフィリピンの歴史は、「神」の名をかりた植民地主義者の暴虐とフィリピン人民の呻吟の歴史であり、土着民の反抗の鮮血によって彩られている。

実際、フィリピン史をひもとくとき、スペインの植民地支配に反抗する土着民の反乱・一揆は枚挙にいとまがない。しかしながら、革命的民族主義組織「カティプナン」[二]（Katipunan）に指導された革命的蜂起が起こる（一八九六年）まで、フィリピン人の反乱・暴動は近代的意味における民族主義のそれではなかった。その反乱・暴動は植民地主義に対する勇敢な反抗には間違いなかったが、地方的・地域的なものにとどまり、民族国家や近代社会へのヴィジョンをもつものでもなかった。それらの多くは、植民地権力によって伝統的特権を侵害された酋長（首長）の復古的反抗であるか、或いは植民地主義者のはげしい抑圧と搾取に対する土着民の絶望的・自然発生的反抗であった。このような反乱は正確な指導や強固な組織に欠け、植民地権力の軍事力や政治的分裂工作などによって、多くの犠牲のみを出して鎮圧されてしまった。[三] しかしながら、一九世紀に入って土着のブルジョアジーやインテリゲンチャが生ま

れると、まず彼らの間から民族主義が芽生えるようになった。

スペインの絶対主義王朝は、一七・八世紀の約二〇〇年間にわたって、フィリピンに重商主義的貿易政策をおしつけ、フィリピンの直接的対外貿易を厳重に制限してきた。しかし、ヨーロッパにおける資本主義や自由主義経済思想の発展、アメリカにおけるイギリス植民地やスペイン植民地のあいつぐ独立、或いはスペイン自身のブルジョア勢力の増大などによって、スペイン政府はフィリピンに対する排他的貿易政策を維持できなくなり、フィリピンを外国の資本や船舶に解放せざるをえなくなった。一八三〇年のマニラ開港とそれにつづくスール（Sual）、イロイロ（Iloilo）、ザンボアンガ（Zamboanga）、セブ（Cebu）などの開港はそのあらわれであった。[四] その結果、フィリピンの対外交渉や貿易が盛んになった。ヨーロッパ先進国の工業製品や資本が流れ込んでくる反面、砂糖、麻、タバコ、コーヒー、ココナッツなどフィリピン特産物の輸出も急激に増加した。活発化した対外的経済交流は、一八六〇年のスエズ運河の開通によってさらに拡大した。貿易の発達は、国内産業ことに輸出農業の発展をもたらし、また交通・輸送手段の発達を促がし、商業を盛んにした。[五]

こうした経済的変化は、当然に社会的変動をひきおこす。緩慢ながらすでに進行しつつあった土着民社会の分解が、資本主義・商品経済の拡大・発展によってさらに深まった。土地やその他財産を失って労働者や小作人に転落する者が増える一方、他方ではこうした没落者を犠牲にして富裕な地主層が形成され、彼らの中から土着ブルジョアジーがあらわれた。[六] 土着ブルジョアジーは輸出農園業や商業、製造業などに従事したが、これら企業は各種の植民地主義的束縛や華僑資本の競争などによって正常な発展を阻止され、小規模なものにとどまった。

ブルジョアジーとともにインテリゲンチャも誕生した。知識階級は、主としてブルジョアジー・地主層・都市小ブルジョア上層など富裕階級の子弟から成っていた。彼らはカソリック教団所属の教育施設や、後には政庁経営の各種

学校で教育をうけたが、彼らの思想形成に大きな影響をあたえたのは、近代ヨーロッパからの移民や出版物であった。フランス革命につづく一九世紀前半のヨーロッパは、民主主義と民族主義の勝利の時代であって、スペインでも自由主義運動が抬頭し、絶対主義をゆさぶりつづけていた。他方アメリカのスペイン植民地はあいついで独立を達成した。こうしたスペイン内外の革命的風潮は間接的ではあるがフィリピンにも伝わり、一部の先駆的土着民の間では自由主義・民族主義への開眼がはじまった。このようなときに、フィリピンの各港があいついで解放され、フィリピンは諸外国と直接交渉をもつようになった。外国貿易の発展は、物的交流のみならず人的・知的交流をも活発にした。スエズ運河の開通はそれをさらに促進した。ヨーロッパとアジア・フィリピンの距離が大幅に短縮され、近代ヨーロッパの思想や知識が出版物や移民を媒介としてどしどし入って来るようになった。移民の多くはフィリピンに永住することを決めた人達であって、中には、スペインからの政治的亡命者や、スペインから独立した中南米諸国からの進取の気性に富んだ志願移民もあった。このような人々の思想・知識や輸入出版物が、フィリピン人の「文明開化」や民族主義化に大きな役割を演じたことは疑いない。(L)

フィリピン知識分子は、一八世紀のフランス啓蒙主義やフランス革命、近代的政治・経済学などを学んで、自由主義者となり民族主義者となった。しかしながら、彼らの大多数の抱いていた民族主義思想は、ブルジョア的改良的民族主義であった。このことは、彼ら自身ブルジョア・地主層など富裕階級の子弟であって、客観的には、主としてブルジョアジーの利益・意思を代表していたことに関係があった。すなわち、ブルジョアジーが大衆（農民・労働者・都市小ブルジョア層など）を指導して民族独立運動を進め、民族独立国家を樹立することを心に描いていたことは想像に難くない。しかし、彼らには、その目標を達成するために大衆を指導して革命的武力斗争にたちあがる意思はもうとうなかった。何故か？　彼らは、大衆を無知・無気力なものとして大衆の革命的エネルギーや力量を軽視するこ

とによって、革命の勝利を頭から否定し、しかも、革命的混乱によって彼らの財産や社会的地位が破壊されてしまうかもしれない点を恐れていたからである。(八) したがって、ブルジョアジーは内心の如何にかかわらず、実際には革命主義の道を避け、改良主義の道を選んだ。遠い将来のことはともかく、現実的要求として彼らが望んだことは、「上から」の改革によってフィリピンがスペインの自治州に昇格し、そしてフィリピン人がスペイン人と平等の権利を享受することであった。大多数の知識分子は、こうしたブルジョアジーの態度を反映し、改良的民族主義の担い手となった。

(一) 例えば、Agoncillo, Teodoro A., The Revolt of the Masses: The Story of Bonifacio and the Katipunan, Quezon City, Ch. I を参照。

なお、スペイン王朝は、フィリピン征服に功績のあった軍人・兵士に一定の「所領」(Encomienda) を与えた。その領主は自分の領地と住民に対して一切の封建的支配・収奪権をもった。領主の収奪は、苛酷であって土着民の反抗・反乱が絶えず、そのため所領制は一七世紀末までには廃止された。

(二) 「カティプナン」の正確な名称は Kataastaasan Kagalanggalang Katipunan ng mga Anak ng Bayan (The Highest and Most Respectable Association of the Sons of the People) という。一般には、略して Katipunan 或いは K. K. K. と呼ばれている。

(三) Benitez, Conrado, History of the Philippines, economic, social, political, Boston, 1929 (東亜研究所訳「比律賓史—政治・経済・社会史的研究—」、下巻、東亜研究所刊、昭和二〇年、第一一—一二章) 参照。

(四) 同前、一六七—一七〇ページ

(五) Barrows, David P., History of the Philippines, New York, 1926, pp. 233—235.

(六) Fernández, Leandro, H., A Brief History of the Philippines, Boston 1932. pp.213—214. Spencer. J. E., Land and People in the Philippines: Geographic Problems in Rural Economy, Berkeley and Los Angeles, 1952, Ch. 9.

(七) LeRoy, James A., The Philippines, 1860—1898: Some Comment and Bibliographical Notes, Durango, Mexico, 1907 (in Blair, Emma Helen and Robertson, James Alexander, ed., The Philippine Islands 1493—1898, Volume LII, Cleveland,1907, p.112ff.). Barrows, op.cit., pp.248—250. Fernández, op.cit., pp.217—219.

(八) Agoncillo, op.cit., pp.281—283.

二、改革宣伝運動の展開

フィリピンにおける改良的民族主義の感情・思想は、一九世紀の一〇年代頃からごく少数の先駆的知識分子の間に芽生え、その後フィリピンの経済・社会的変化にともなって、しだいに知識階級やブルジョアジーの間に拡がっていった。しかしながら、その思想・感情は、植民地政権と教団僧の頑迷な態度・かしゃくない弾圧政策によって組織的運動にまで発展することができなかった。一八六八年のスペイン・ブルジョア革命と、それにつづいた自由主義的ラ・トルレ（Carlos de la Torre）総督のフィリピン統治（一八六九—一八七一年）は、フィリピンの民族主義を育成する重要なチャンスであったが、それも長くはつづかなかった。スペインにおける反動政治の復活にともなってフィリピンでも再び恐怖政治がはじまり、カヴィテ（Cavite）における兵器廠労働者と兵士の暴動（一八七二年）を契機に、多くの民族主義者や進歩的知識分子が逮捕・投獄された。彼らはその暴動には直接関係はなかった。それにもか

わからず、植民地政権と教団僧はその暴動を口実に、ブルゴス（Jose Maria Burgos）など著名な民族主義指導者を死刑に処した。[三] フィリピンを覆いつくした恐怖政治は、植民地権力による「上から」の自由主義的改革を期待しながら合法運動を進めようとする改良的民族主義運動に活動の余地を残さなかった。改良的民族主義者や知識分子は、残忍なテロの横行するフィリピンを去って、スペイン、イギリス、フランス、シンガポール、香港、日本などに移った。また、富裕階級の中でも比較的進んだ考えをもった者は、その子弟をスペインその他ヨーロッパ諸国へ留学させた。

海外におけるフィリピンの民族主義者や知識分子は、各地域で小さな集団を組織し、フィリピンの改革を論じ合った。ことにスペインにおけるフィリピン人の活動は活発であった。彼らのおもな狙いは、スペインの自由主義勢力や大衆に対してフィリピンにおける植民地政府・教団僧の専横を訴え、フィリピン改革の要求をスペイン議会に反映させる一方、他方では情宣出版物をフィリピンに送り込んで、同胞の民族主義的啓蒙をはかることにあった。フィリピン史上、彼らの運動は一般に「宣伝運動」（Propaganda Movement）と呼ばれている。その運動のおもな指導者は、デル・ピラル（Marcelo H. del Pilar）、ロペス・ハナエ（Graciano López-Jaena）、リサール（José Rizal）ポンセ（Mariano Ponce）、ルナ（Antonio Luna）、デ・レテ（Eduardo de Lete）等であった。

デル・ピラルはもともと弁護士であったが、一八七二年のカヴィテ暴動の前後から一八八八年にフィリピンを去るまで、教団僧・植民地権力の弾圧の危険にさらされながら、郷里ブラカン州を中心に大衆啓蒙活動を続けた。彼はタガログ語のパンフレット・新聞の発行や各地への遊説をとおして、フィリピン人の愛国心・自尊心・勤勉・犠牲の福音を説くとともに、勇敢に教団僧の横暴を糾弾した。[四] ブラカンの教団僧は彼に対して「反スペイン分子」・「煽動家」（filibustero）の刻印をおしつけ、植民地政権をして彼を追放ないし死刑に処せしめようとした。彼は逮捕寸前に

フィリピンを去り、スペインへ渡った。デル・ピラルは、スペインにおいて、実際政治家・組織活動家・ジャーナリストとしての優れた才能を発揮して、積極的な民族主義活動を行なった。彼はスペイン在住フィリピン人の非公式代表としてスペイン国会議員に接近し、議会でフィリピン改革案を通過させる努力を続ける一方、「スペイン・フィリピン協会」（Asociacion Hispano-Filipina）やメースン結社（Masonry）或いは『ラ・ソリダリダード』紙（La Solidaridad）に関係し、それらの指導的人物となった。(五)

スペイン・フィリピン協会はフィリピン人とスペイン人の両会員から成り、フィリピンの自由主義的改革をめざす団体であって、次のような政策目標を掲げた。すなわち、(1)フィリピンの全ての学校におけるスペイン語の強制的授業、(2)裁判所・刑務所の改革、(3)中等校の開設、(4)綿花・カカオ栽培や農業銀行設立など農業振興策の実施、(5)鉄道の建設、(6)関税・公共行政の改革などがそれである。同協会の会長にはマドリッド大学の歴史学教授モライタ（Don Miguel Morayta）がなったが、アクティヴ・メンバーはデル・ピラルをはじめヨーロッパ在住の全フィリピン人であった。(六)

他方、ラ・ソリダリダード紙は宣伝運動のマス・メディアとして、一八八九年二月マドリッドにおいてロペス・ハエナを中心に創刊（隔週刊）されたが、同年一二月彼に代ってデル・ピラルが編集長となり、活発な論陣を張った。ルロイ（James A. LeRoy）によれば、「デル・ピラルはフィリピンの当面する具体的・現実的諸問題、とくに経済問題をとりあげ、フィリピン人の抱いている不満を卒直に代弁した」(七)。ラ・ソリダリダード紙には彼のほかマリアノ・ポンセ、リサールなど先に掲げた宣伝運動の指導者達が健筆をふるい、同紙はフィリピン指導層の要求を明白に反映していた。それによれば、彼らの要求は決して極端なものではなく、穏健な自由主義的改革を内容とする改良的民族主義のそれにほかならなかった。つぎはそのおもな点である。(八)

(1) フィリピンをスペインの自治州とすること。
(2) 教団僧をフィリピンから退去させ、教区の非教団化をはかること。
(3) フィリピン人に法の前の平等、集会・言論・出版・結社の自由、広範な社会的・個人的自由を保障すること。
(4) フィリピン人代表をスペイン議会へ参加させ、総督の権限を制限し、そして行政部門へフィリピン人を参加させること。

スペイン・フィリピン協会とラ・ソリダリダード紙のキャンペインは、かなり広範囲にわたった。このことは、フィリピン人代表をスペイン議会に参加させよという彼らの請願運動が、スペインの五二の市や町に拡がったことからでも推測することができる。その請願は一八九五年二月スペイン議会へ提出されたが、その請願には、フィリピン全体で三一名の下院議員と一一名の上院議員を派遣することが要求されていた。(九) また、ラ・ソリダリダード紙はフィリピンにおける厳重な検閲網をくぐってそこに送り込まれ、知識分子の間に熱心に読まれた。

他方、宣伝運動はフリーメースンの運動とも結びつき、その積極的支持をうけた。海外のフィリピン人の多くはすでに各地でメースン結社に加入していたが、スペインでは一八八九年四月、フィリピン人だけから成る最初のメースン支部が結成された。それはロペス・ハエナの指導のもとにバルセロナで結成され、「レヴォルーシオン」(Revolución) と呼ばれた。ついでその翌年にはマドリッドにおいても、「ラ・ソリダリダード」(La Solidaridad) と呼ぶ支部が結成された。その支部には、デル・ピラル、リサールをはじめ同市の全フィリピン人が加盟し、また「レヴォルーシオン」支部(後に解体された)のメンバーも加入した。デル・ピラルは、メースン組織を宣伝運動の足場にするとともに、それをフィリピン人民の政治教育機関として利用しようと考えていた。メースンのフィリピン人支部

は、スペイン・フィリピン協会の会長であるモライタ教授の積極的支持をうけることができた。彼はスペインの指導的メースンであり、フィリピンにおける自由・平等の発展に特別の関心をもつGran Oriente Españolの責任者であった。一八九〇年一〇月、スペインのメースン大支部（Grand Lodge）は各メースンに対し、スペインの上下両院議員がフィリピン人の議会参加に協力するよう働きかけることを指令したが、これを契機にメースンの各組織も、スペイン・フィリピン協会やラ・ソリダリダード紙とともにフィリピン改革宣伝運動のセンターとなった。(一〇)

このように、デル・ピラルがラ・ソリダリダード紙に健筆をふるい、スペイン・フィリピン協会やメースン支部を指導しながら、宣伝運動の具体的活動面で重要な役割を演じていたとき、リサールは主として著作・研究活動をとおして、宣伝運動の理論・思想面に大きな貢献をした。リサールは「フィリピンの最も偉大な英雄」として、現在も国民の厚い尊敬をうけている。比較的富裕な家庭に生まれた彼は、マニラの「アテネオ・ムニシパル」（Ateneo Municipal）でヤソ会の教育をうけた後、一八八二年ヨーロッパに渡り、まずスペインにおいて医学（眼科）を専攻し、後にフランス、イギリス、ドイツを歴訪しながら著述や研究をつづけた。リサールは医学のほかに、フィリピン人が生来無能であるかどうかを確かめるため民族学・人類学の研究をも行なった。彼はその研究において、ヨーロッパ人にひけをとらない才能を発揮するとともに、フィリピン人が「劣等人種」でないこと、各人種・民族の長所や短所は一般に風土と歴史の所産であるということに自信をもつようになった。彼は、フィリピン同胞が決して劣った民族でないことを証明し、それを彼らに自覚させる目的から、モルガ（Antonio de Morga）の『フィリピン群島誌』（Sucesos de las Islas Filipinas）に注釈を加え、それを複刻した。リサールのこの業績は、フィリピン史、ことにスペイン人によって無視されてきた土着民の歴史的役割に関する研究に大きな意義があったといわれている。(一一)

リサールは一八八七年二五才のとき、彼の最初の小説『社会の癌』（Noli Me Tangere）を発表した。そこで

は、西欧化した知識人から無知の農民にいたるまで各種タイプのフィリピン人や、政治制度とその欠陥、教育施設の不備、政府官吏の専横、無辜の人民に対する処刑、教団僧の横暴と腐敗、改革に対する人民の要求等々、フィリピン社会の現実がありのままに描写されていた。(一二) この小説はスペインでもフィリピンでも読者に深い感銘をあたえ、たいへんな人気を呼んだ。教団僧は「神聖な宗教に反する煽動書」であるとヒステリックにわめきちらし、植民地当局をして禁書令を施行させた。しかし、皮肉にも、このような処分がかえって小説の人気を煽る結果となり、読者はあとをたたなかった。リサールは、教団僧の憎悪の的となったが、反対にフィリピン人民の神聖なアイドルとなった。(一三) 彼は、『社会の癌』についで、第二の小説『貪欲の支配』(**El Filibusterismo**) を出版した。それは最初の小説よりさらに政治的であった。彼はその小説において支配層（政庁官吏・教団僧など）の害悪を暴露し、これら弊害に対する改良的解決策を示し、もしそれが実施されなければ革命が起こるであろうと予言している。それはスペインに対する彼の警告でもあった。(一四)

(一) *See* Kalaw, Maximo M., The Development of Philippine Politics (1872—1920), Philippine Political Science Series Volume One, Manila, 1926, pp.19ff.

(二) Fernández, op.cit., pp.224—227.

(三) Kalaw, op.cit., pp.30—32. Barrows, op.cit. pp.253—254. Fernández, op.cit., pp.228—231. C・ベニテス、前掲訳書、一九七—一九八ページ。ソ同盟科学アカデミー歴史学研究所編「植民地・従属国の歴史」Ⅲ、三一書房、一九五四年、九〇三—九〇四ページ。

(四) Agoncillo, op.cit., pp.24—25.

(五) Kalaw, op cit., pp 33—39.

(六) Ibid., pp.39—40.
(七) LeRoy, op.cit. (Blair and Robertson, ed., op.cit., p.177)
(八) Agoncillo, op.cit., pp.24 —26. Kalaw, op.cit., pp.40—41. ゲニテス、前掲訳書、二〇九—二一〇ページ。
(九) Kalaw, op.cit., p.41.
(一〇) Ibid., pp.42—43.
(一一) Ibid., pp.51—52, 56—57. LeRoy, op.cit. (Blair and Robertson, ed., op.cit., pp.180—181)
(一二) *See* Rizal, Jose, The Social Cancer, English Version of Noli Me Tangere, by Charles Derbyshire, Manila, 1912.
(一三) Agoncillo, op.cit., p.29.
(一四) *See* Rizal, José, The Reign of Greed, English Version of El Filibusterismo, by Charles Berbyshire, Manila, 1912.

三、改良的民族主義の挫折

スペインにおけるフィリピン改革宣伝運動の指導者達は、フリーメースン運動をとおして彼らの運動をフィリピンに拡大・発展させようとした。デル・ピラルは同志ルナ（Antonio Luna）とラクタウ（Serrano Laktaw）に対し、フィリピンにメースン支部を樹立することを命じた。ルナは帰国しえなかったが、ラクタウは首尾よく帰国し、一八九一年一月マニラにおいてフィリピンで最初のメースン支部（Niladと呼ばれた）の結成に成功した。その会員は、主として、フィリピンの自由主義的改革を求める知識分子や富裕階級のメンバーから成っていた。それだけに、支部

綱領に掲げられているフィリピン問題についての要求・目標も、スペインにおける改革宣伝運動のそれと軌を一にするものであった。その綱領では、フィリピンにおける民主政治の確立、フィリピン人のスペイン議会への参加、そしてフィリピンが本国と同様の権利・義務を備えた州となることなどが強く要求され、最後に、「われわれは改革、改革、改革を欲する」と述べられている。(一) そこでは、教団僧に対する非難や教団僧追放の要求は公然と掲げられてはいないが、メースンが反教団的であったことは疑いない。(二) メースンが植民地政権・教団僧の弾圧の危険をもかえりみず大胆にこうした綱領を掲げ、しかも熱心に大衆に呼びかけを行なったことは、彼らに深い感銘を与えずにはおかなかった。メースンの組織はフィリピン全体に拡がり、一八九三年五月までにその支部も三五を数えるにいたった。(三)

このようなときに、一八九二年六月、リサールがヨーロッパから帰国した。その目的は民族主義組織を結成し、みずから改革運動を指導することにあった。彼はフィリピン各地を廻って知識人や愛国主義者に会い、彼の目的を支持するよう呼びかけた。その反響は大きかった。その年の七月、リサールは、サルヴァドル（Ambrosio Salvador）、ラ・ローサ（Agustin de la Rosa）、アレッラノ（Deodato Arellano）等とともに「フィリピン連盟」（Liga Filipina）を結成した。この民族主義組織は部分的にはメースン組織をモデルとしてつくられたが、その結成は民族主義者がメースン組織だけに依存することに甘んじなかったことを示している。(四) フィリピン連盟の憲章によれば、連盟の目標はつぎの五項目であった。(五)

(1) フィリピンを一つの緊密で活動的な同質的結合体に統一すること。
(2) 人民の全ての欲望と必要に対して、相互扶助を行なうこと。
(3) 全ての暴力と不正に対して防禦すること。
(4) 教育、農業、商業を奨励すること。

(5)　改革の方策を研究し、これを実行に移すこと。

すなわち、フィリピン連盟はいかなる種類の暴力をもこれを否定し、平和的・非暴力主義的運動をとおして、フィリピンのブルジョア・自由主義的改革を達成することを求めていた。また、同連盟はフィリピンのスペインからの独立・分離をめざしてはいなかった。このようなフィリピン連盟の性格は、その会員の大部分が改良的民族主義者や有産階級、知識分子によって占められていたことの反映であった。

しかし、植民地政府と教団僧はこうした穏健な組織・要求さえも許す意思は全くなかった。彼らはリサールの帰国以来、彼の言動を注意深く監視しながら逮捕の機会をうかがってきたが、フィリピン連盟が結成されるに及んで、連盟がスペインとフィリピンの分離を画策しているとの口実をデッチあげ、連盟結成の四日後（七月七日）にはリサールを逮捕し、裁判にもかけず、直ちにフィリピン南部のダピタン（Dapitan）へ流刑に処した。フィリピン連盟はその後数ケ月間存続したが、財政難と会員相互の運動方針に関する意見の不一致によって解体してしまった。さらに、テロリズムはフリーメースンに対しても襲いかかった。教団僧はしばらくの間メースンの活動を監視していたが、後にはその運動の教義や発展を危険視するにいたり、弾圧に乗り出した。教団僧はリサールその他愛国主義者の弾圧に使った常套手段を弄し、メースンがフィリピンの革命・分離の陰謀を企んでいるとのデマ宣伝をひろめ、植民地当局をして多くのメースンを逮捕・投獄させたのである。当局はメースン運動に関して虚偽の報告や事態を誇張した報告を本国政府に送って、政府を煽動した。スペインでも、政府の干渉・圧迫によって、フィリピン人の改革宣伝運動やメースン運動がだんだん困難になっていった。(八)

このような危機的状況に直面して、改革宣伝運動の指導層の間に動揺と分裂が起こった。デル・ピラルは、平和的宣伝運動はもはや無用であると信ずるようになった。彼は、フィリピンに真の改革をもたらすためには革命運動以外

にないと考えるようになり、その革命運動を勝利させるには、日和見的で自己保全に汲々たる知識分子・富裕階級に呼びかけることをやめ、下層大衆に働きかけ、彼らの支持を得る必要があると信ずるようになった。そして、彼は一日も早くフィリピンに帰って民族運動を指導しようとしたが、不幸にして肺病を患い、一八九六年七月スペインで客死した。しかしながら、ルロイ（James A. LeRoy）によれば、彼の急進的思想は革命的民族主義組織カティプナン結成のきっかけをつくった。(七)

カティプナンの指導者ボニファッシオ（Andres Bonifacio）は最初フィリピン連盟の結成に参加したが、連盟解散後カティプナンを結成し、下層大衆を指導して革命斗争をおし進めた。その運動は大衆の革命性を反映して急速に拡大してゆき、「フィリピン革命」の原動力となった。(八) デル・ピラルやボニファッシオの場合は、改良的民族主義者が革命的民族主義者へ脱皮してゆく過程を示していた。しかし、このような人間変革はごく少数の改革論者・知識分子に限られていた。もちろん、大多数の改革論者もスペイン・植民政権への期待を失い、平和的手段によって彼らの要求を実現できないことを悟るようにはなったが、決して革命運動にたちあがろうとはしなかった。狂暴な権力の前に沈黙してしまった。彼らは人民大衆の革命的力量を信ずることができず、権力や社会混乱を恐れた。

こうした改良的民族主義者の態度はブルジョア・地主層など有産階級や知識階級の態度でもあったが、リサールの言動にそれが典型的にあらわれていた。ダピタンへ流刑に処せられたリサールは、そこで軟禁生活を続けた。彼は政治活動を禁止され、もっぱらダピタン町民の福祉や文化の向上に意を注いだ。彼の第二の小説『貪欲の支配』においてみられたように、リサールはフィリピンに革命の起こることを予言し、彼自身も心理的には革命を否定しているわけではなかったが、実際には革命の起こるのを恐れていた。もしリサールにその気さえあれば、ダピタンから逃亡し、革命運動を指導する機会は常にあったし、革命運動を指導するようカティプナンからの熱心な要請もあった。し

かし彼は、大衆の無知の側面や知識・富裕階級の革命への恐怖心を何より重視し、革命は時期尚早であるとしてこれを認めなかった。(九)

リサールはダピタンにおける不自由な軟禁生活からの解放と自由な生活を欲したのであろうか、スペイン軍医としてキューバに赴くことを志願し、スペインに渡った。しかし、フィリピンでは一八九六年八月末カティプナンの指導する大衆蜂起が起こり、リサールは「反乱・治安攪乱・非合法結社結成」の嫌疑をかけられ、マニラに送還された。その罪状が当局のデッチあげであったことはいうまでもない。大衆の革命蜂起に驚愕・狂気した植民地権力・教団僧は、革命主義者・改良主義者を問わず全ての進歩分子を抹殺しようとしたのである。秘密軍法会議は名ばかりの審議の結果、リサールに死刑を宣告した。彼は、「事態は犠牲者を要求している。自分は選ばれたこの犠牲者として、全ての罪を一身に引きうけよう」と辞世の言葉を残して、刑場の露と消えた。(一〇) リサールのほかにも多くの改革論者やその支持者が逮捕・投獄された。スペインにおいても、スペイン・フィリピン協会は解散を命ぜられ、改革宣伝運動、フィリピン・メースンに対する弾圧が行なわれた。

こうして、改革宣伝運動・改良的民族主義運動はカティプナンの蜂起を契機に完全に挫折・敗退し、フィリピン民族独立運動の指導権はカティプナンを先頭とする革命的民族主義勢力の手に移った。改良的民族主義運動の敗退の要因は、すでに述べてきたところから明らかな如く、第一に、権力の側に穏健なブルジョア・自由主義的改革さえ認める意思が全くなかったこと、第二に、改良的民族主義勢力の側に、大衆を指導しながら革命斗争に起ち上がる勇気に欠けていたことにあった。(一一) しかしながら、改良的民族主義勢力が改革宣伝運動をとおしてフィリピン人の民族主義感情・民族意識を啓発したことの意義はこれを認めねばならない。その点で、リサールの役割はとくに大きかった。フィリピン人の民族主義的・政治的覚醒の種子は、リサール以前の愛国者によってすでに播かれていたけれども、その

種子を発芽させ育成した彼の功績は偉大であった。彼の書物はフィリピン人の民族意識をかきたて、民族的統一への足がかりを築いた。しかし、リサールは自分の著作がこうした大きな役割を演じたことに気づかないまま他界した。彼は、カティプナンが彼の生活や書物によって啓発されたことも、彼がカティプナンの名誉会長に推されていたことも、そして彼の肖像画がこの革命組織の会議場に飾られていたことも知らなかった。リサールの死は広範な人民の民族的憤怒をよびおこし、カティプナンの革命運動を真に民族的規模にまで拡大発展させる契機となった。リサールは死をとおして革命の魂となったのである。(一)

(一) その綱領の要点は Agoncillo, op.cit., pp.34—35 に引用されている。

(二) Majul, Cesar Adib, The Politlcal and Constitutional Ideas of the Philippine Revolution, Quezon City, 1957, pp.188—189.

(三) Agoncillo, op.cit., p.35. なお Kalaw, op.cit., p.43 によれば約八五の lodges and triangles が樹立されてた、という。

(四) LeRoy, op.cit. (Blair and Robertson, ed., op.cit., p.183)

(五) フィリピン連盟憲章については、その全文が次の文献の中に編集されている。Blair, E. H.and Robertson, J. A., ed., The Philippine Islands 1493—1898, Voi. LII, 1907, pp.217—226.

(六) Kalaw, op.cit., pp.45—46.

(七) LeRoy, op.cit. (Blair and Robertson, ed., op.cit., p.178)

(八) カティプナンおよび「フィリピン革命」については、例えば次を参照—Kalaw, Teodoro M., The Philippine Revolution, Manila, 1925. Agoncillo, The Revolt of the Masses, op.cit. Majul, The Political and Constitutional Ideas of the Philippine Revolution, op.cit.

(九) Agoncillo, op.cit., pp.107—109, 117—127.

(一〇) マニラス、前掲訳書、一二一一一二二二ページ。

(一一) Agoncillo, op.cit., pp.41—42.

(一二) Kalaw, M. M, op.cit., p.67.